

災害用早期設置型 住宅復興支援ハウス の提案

2005年の新潟県中越地震の際には被災地の小千谷市で、災害ボランティア4名が約1ヶ月間使用し、ボランティアの拠点施設と救護所の役割を果たしました。また、東日本大震災においては、宮城県石巻市社会福祉協議会ボランティアセンターに設置され、テント泊をしている災害ボランティアの救護所として使用されています。

災害ボランティアの生活は、その多くが持参したテントに寝泊りしているのが実情です。居住空間は狭く、冷暖房設備もない生活のなか、ハードなボランティア活動により体調を崩してしまう人が多くいます。支援ハウスは狭い敷地に多数設置することが可能であり、その有効性が確認されています。

活用事例から、被災地における小規模拠点施設や災害ボランティア、仮設住宅建設作業員などの短期居住施設、自衛隊の野営施設などに有効だと思われます。また、大都市大震災においては、公園や小さな空き地に設置できるなどの利点があります。

また、設置後も簡単に移動でき、保管管理が容易で再使用できることから、環境への配慮がなされています。

支援ハウスの活用には「備蓄」が不可欠であり、度重なる災害の発生、「必ず来る」と予測される関東、東海、東南海地震への対応のためにも備蓄されることを願っています。

工学博士 岡村精二
(環境・災害対策分野)

展示予定の災害用早期設置型組立て式「復興支援ハウス」の概要(2戸展示)

A. 6年前に製作し復興支援ハウス

新潟県中越地震で使用し、現在、宮城県で災害ボランティアの救護用に使用されている支援ハウスです。床面積6.7㎡ですが、4人家族が暮らせる機能を備えています。

材質はFRP(強化プラスチック)製で、多分、「世界で初めてFRP製で造られた住宅」だと思われます。当日は宮城県から搬送します。(別紙のパンフレット参照)



「2005 国際プラスチックフェア」
特別展示(千葉県幕張メッセ・玄関にて)



災害ボランティアの救護所として使用
左:新潟県小千谷市(2005.11-12) 右:宮城県石巻市

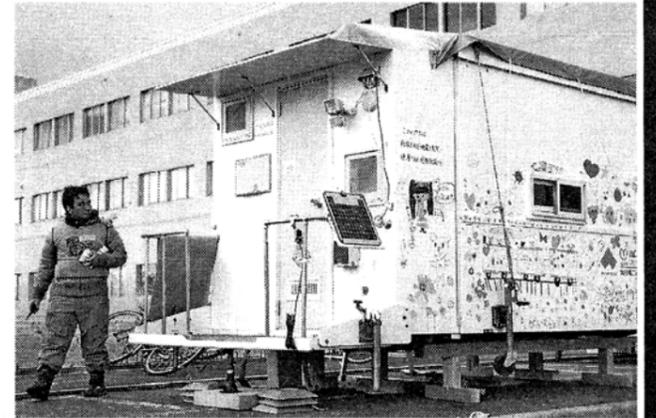


B. 現在、製作中の新しい支援ハウス

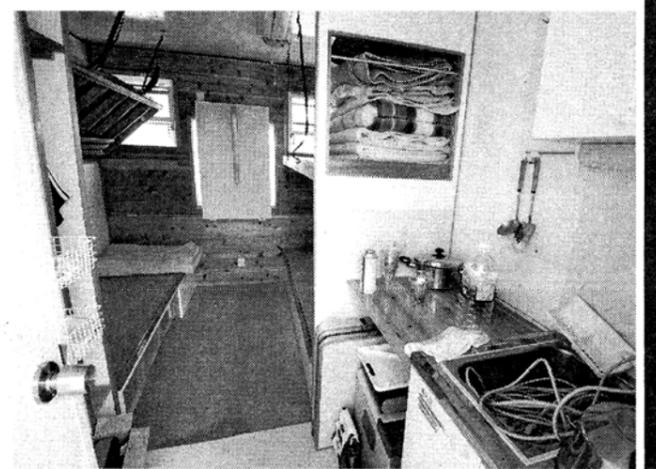
床面積9.25㎡で、間取りはほぼ上記と同じですが、トイレは外付けとし、エアコン、温水器、大型太陽電池、フリースペースを備えています。4トントラックで2戸、10トントラックで6戸積載可能な最大限の大きさとして設計しています。

1時間で建つ!!「支援ハウス」

宮城県石巻市
被災地で仮設住宅の建設が急務となる中、大人4人で1時間あれば簡単に組み立てられる「復興支援ハウス」が29日までに、宮城県石巻市の避難所の一角に到着。開発に携わった山口県議の岡村精二さん(57)は「避難生活のストレスから被災者を解



▼台所に二段ベッド、4人で居住▼



(上から)1時間で組み立て可能な「復興支援ハウス」。台所や二段ベッドなどが備えられている



放すための、早さと量を優先すべきだ」と、ハウスの活用を提案している。

開設のきっかけは、仮設住宅の建設に時間がかかり、被災者がストレスの多い避難所生活を強いられる阪神大震災。簡単に建つハウスの必要性を痛感した岡村さんは、県議をしながら大学

院で防災工学を専攻した山口大や、同県宇部市の建設会社と試行錯誤を重ね、9年がかりで完成させた。新潟県中越地震ではボランティアが試作品に約1カ月滞在した。組み立てに重機などは不要。折り畳んだキットを起すと、床面積約7.5平方メートル、高さ約2.5メートルの4人が寝泊まりできるハウスが出来上がる。

東日本大震災の災害ボランティアの現実(写真左上より)

- 2011.3 積雪の中に造られた災害ボランティアのテント
- 2011.6 台風2号で壊滅した宮城県石巻市の災害ボランティアのテントの状況)
- 2011.6 相馬市に設営された自衛隊のテント

被災者はもちろん災害ボランティアも、冷暖房設備もない過酷な生活を強いられています。

スポーツニッポン 2011.3.30